



海辺・川辺調査レポート

※このフォームをご利用いただくか、ご自分で作成していただいで構いません。

■ 名 前 (ふりがな)	橋元 孝太郎
■ グループ名	
■ 学校名	松伏町立松伏小学校
■ 学 年	第6学年
■ 年 齢	11歳
■ お手伝いしていただいた方の名前	松伏役場 社会教育課、秘書広報課の人

■ レポートした場所	埼玉県北葛飾郡松伏町付近 中川 (庄内古川、利根川)、江戸川
■ レポートの題名	『松伏町の川の移り変わり』
■ 内 容	<p>僕の住んでいる埼玉県には海がないけれど松伏町には、東に江戸川、西に古利根川、町の北部から中川と3本の川が流れている。東京から30km圏内に位置しており自然にめぐまれた所であるとよく聞かすが、3本の川ともとても濁っていてヘドロ様な汚い川である。魚や生き物もいないと思う。僕は、川とは水がきれいで小さい魚や蟹がたくさんいて、僕が泳いでいると一緒に泳いでくれる魚がいる川が川だと思っていたので、どうしてこんなによごれて汚く、臭いのか、手を浸けることも嫌だなと感じた。昔からこんな川だったのかと以前のことを調べてみようと考えた。中川が、松伏町を横断するように流れている。埼玉県の羽生市い源を発し、東京湾に流れ込むまでの延長が80.8km、流域面積286.2km²の一級河川で、現在は洪水時、江戸川への排水を促すことにより下流部の流量を抑制することが可能となった。中川は、現在のようにゆるやかで、まっすぐに近い状態の川ではなく、大正時代は、蛇行していたため、少し雨が降ると川の曲がっている場所で川が反乱を起こし、家や田んぼ、畑が浸水したりして大きな水害が多かったそうです。また、中川は江戸川につながっていたために、江戸川の水位があがると元々江戸川の水位の方が高いために、中川に逆流して来て水害が起こるといふ悪循環を起こしていたようです。(資料-4、a 資料-4b)</p> <p>しかし、川は町の人々にとってはなくてはならない生活の一部の場だったようです。川の水は生活に必要な水となり、田畑の農業用水、交通手段となり物資の運搬・人々の足となっていたそうです。子どもたちは、</p>

川で水遊びをしたり、ふな・鯉・なまずや名前もよくわからない川魚を捕まえては食べたりしていました。また、今はアメリカザリガニしかないけれど、この頃は、日本ザリガニがたくさんいて採って茹でて食べたり、うなぎが採れるとご馳走だったそうです。その上、川がきれいだったので川のりも採れたと聞いて、のりは海でしか採れないと思っていたのでびっくりしました。また、蛍やトンボもたくさん飛んでいて気持ちが和んだそうです。しかし、現在はザリガニを捕まえることができてもあの汚い川にいるかと思うと食べようというより気持ちが悪くなります。どうしてこんなに川が変わってしまったのかと考えてみると水害から人々を守るために人工的に手を入れたことやダムで川の生体系が変わり、川が人々の生活の一部でなくなったからではないかと思えます。道路が整備され交通手段が変わったことや水道が引かれるようになり川が存在しなくても生活に困らなくなったからだと考えます。僕も汚れた川は川とっていないぐらいだった。

しかし、人は人だけでは生きて行くことはできない。人も自然界の一つの存在であり、一部だと考えると地球の中で自然と共存していく事が大切なのだと思えます。そのために、松伏町の3本の川を水がきれいな川にしたいです。水害は、整備によって見られないのでこれ以上、必要のないのに人工的に手を加えることを最小限にしていくことと、生活廃水や汚れた水を極力流れ込まないようにするために一人一人が水を大切にして、使う水の量や方法を考える必要があると思えます。そして、ごみを川に捨てないこと。そのために川の存在を意識することが重要である。僕は、周りの人たちに声を掛けて、一緒に行動していこうと思う。将来、川辺に座って川の中を覗いてどんな生き物がいるか見てみたいです。そして、ひよっとしたら一緒に泳いでいるかもしれないと思えます。

■ 写 真 名 前 _____

※写真や資料で、自分のもの以外を使用する場合は、必ず、何の資料か、誰の写真かなど、連絡先や住所などをメモして保存しておいてください。公表する際に、必要となります。

※本文（内容）と写真は、セットとして、メールで送信するか、郵送してください。

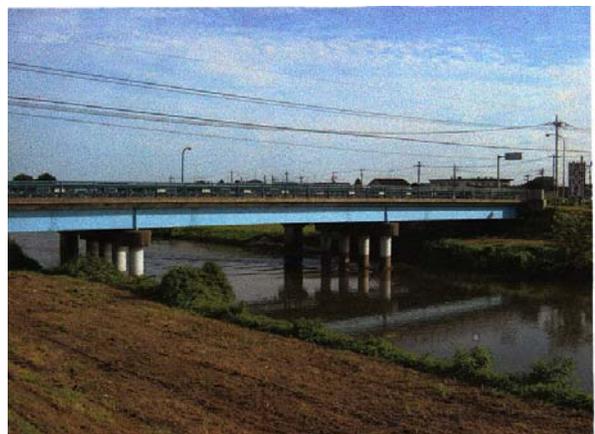
※この用紙以外でも構いません。

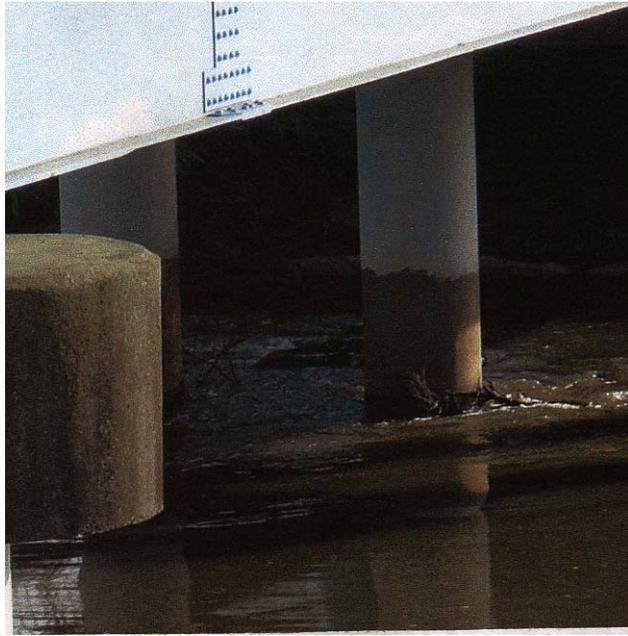
資料一， a



この写真は、大正11年（1922）9月の豊橋架橋工事のものです。庄内古川（中川）の流路は、寛永18年（1641）の江戸川掘削により、享保13年（1728）まで金杉で江戸川に合流していました。すなわち、現在の豊橋より北に約500mの所から、金杉と吉川市上内川との境に沿って、野田橋付近で合流していました。当時は、合流地点の高低差のために、度々水害にあったため、江戸時代を通して合流地点を南の方へ数度付け替え工事をしました。それにより、江戸川と庄内古川は、金杉から並行して三郷市まで流れていました。

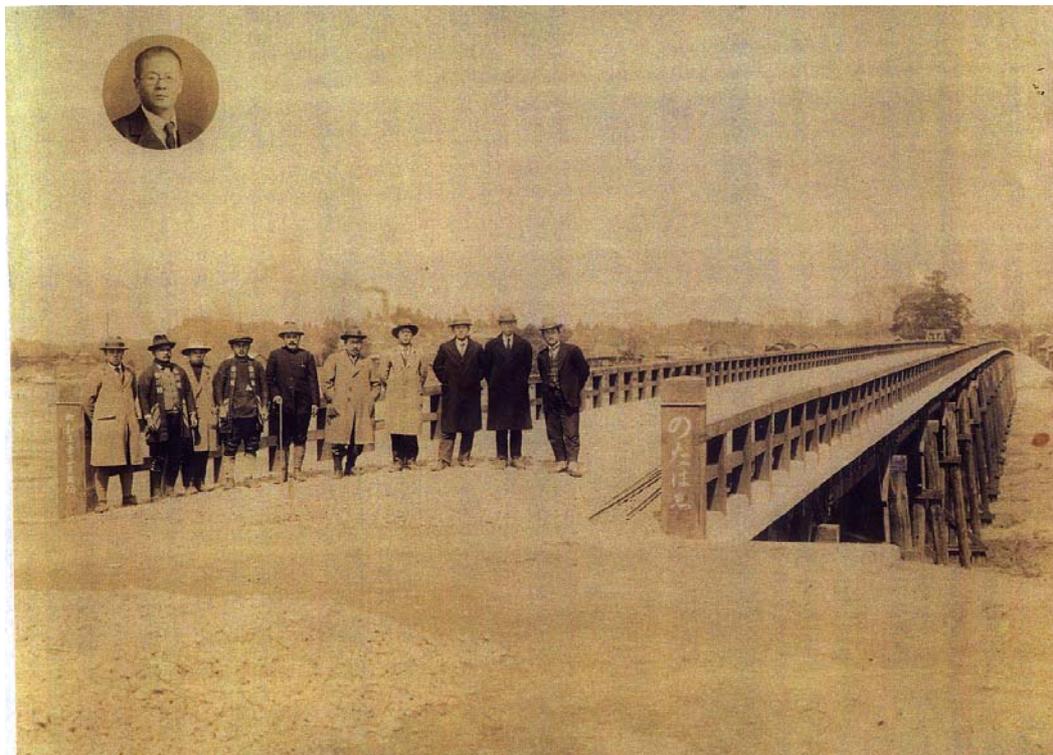
資料一， b





現在の豊橋は昔と比べて立派で丈夫です。けれども写真からも分かるように川の水はずいぶんよごれています。水とはいえないほど汚れていごみも沢山落ちています。それに、流れもほとんどみられません。

資料一 2, a



野駄橋は昭和 3 年（1928）2 月に完成しました。4 月に開通しました。この写真は完成当時の写真です。当時の橋は木造で、河川改修の前であったため川幅も現在より狭く、橋の長さも今より大分短めでした。開通式の時は、神主による祈禱が行われ、渡り始めとして親子 3 代の夫婦が渡り初めを行いました。それまで渡し舟だけだったのが、橋の開通で一気に便利になり、昭和 11 年には 1 日の人馬の往来は約 3000、自動車は約 400 台を下らない量でした。

資料一 2, b



現在の野駄橋の交通量は年々が増えていきます。この写真をとるときは橋の近くに行こうとしましたが、信号を渡る横断歩道もなく、車も多いので無理でした。

資料一 3



横の写真は昭和3年頃の松の木橋です。橋のたもとに松が生えていたのが名前の由来です。



上の写真は現在の松の木橋の様子です。今は3代目の松の木が植えられています。

資料一 4 a



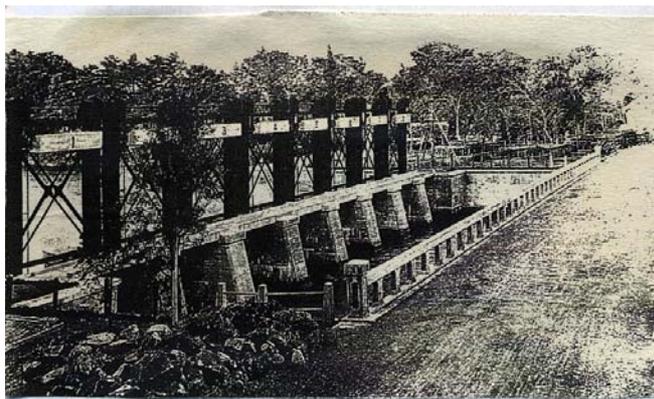
この写真は、大川戸の民家の被害状況です。屋根の下まで水につかり、屋根の右側の一部に向こう側が見え、一面水につかった様子が分かります。昭和 22 年（1927）9 月 14 日から 15 日まで関東地方に台風が接近し、記録的豪雨になりました。この台風は「カスリン」台風と呼ばれ、県内の利根川や荒川などで 83 ヶ所が決壊し、各地で大きな被害を受けました。町内の被害状況は、死者 1 名、破壊及び流出屋 11 戸、浸水家屋 1341 戸（全戸数 1533）、浸水田畑 774 町（約 76 ヘクタール）におよびました。全戸数 87% が浸水し、田畑だけでも町の面積の約半分が水没しました。宅地・山林・その他を加えると、町内の大部分が浸水しました。

資料一 4, b



現在は町内での水害は全く見られません。それよりか、家が沢山立ち並び、住宅街が増えています。

資料一 5



横の写真は大正 10 年頃の寿橋と古利根堰です。現在（下の写真）の橋と堰はそれぞれ昭和 45 年、62 年に造り替えられ、主要幹線道路・農業用として大いに活用されています。



上の写真は現在の古利根堰の様子です。

資料一 6



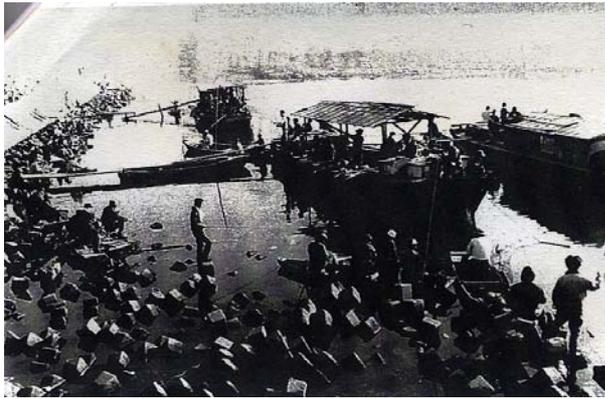
明治 43 年 (1910) 年 8 月 2 日から 12 日まで関東一円に大雨が降りつづけました。10 日から各河川の堤防が決壊し始め、県内で 314 ヶ所を数えました。浸水した地域は河川流域で県内東半分は泥海となり、その末端は東京にまで及びました。この大災害は寛保ニ (1742) 年以来といわれ、町内もほぼ全域で浸水し、大被害を受けました。この写真は、大水害により決壊し、翌 44 年 4 月に修復工事をした時の写真です。土波打ち (棒) で横 1 列になって、地面を叩きながら横に移動し、土手を固めました。

資料一 6

横の写真は現在の土手の様子です。



資料一 7



昭和 40 年頃の越谷市と松伏町に架かる寿橋から下流を見た風景です。以前は釣り船が浮かび、夏になれば子供たちが泳いでいました。



現在では船もなくなり、釣りをする人も少なくなっていました。



現在では船もなくなり、釣りをする人も少なくなっていました。

現在（平成 15 年（2003））の古利根川の様子

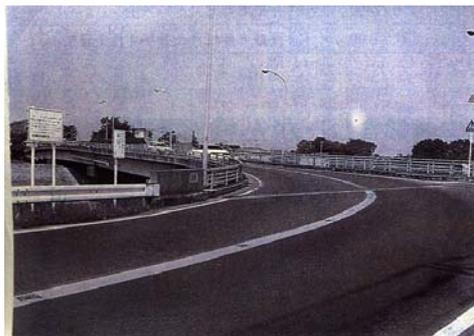
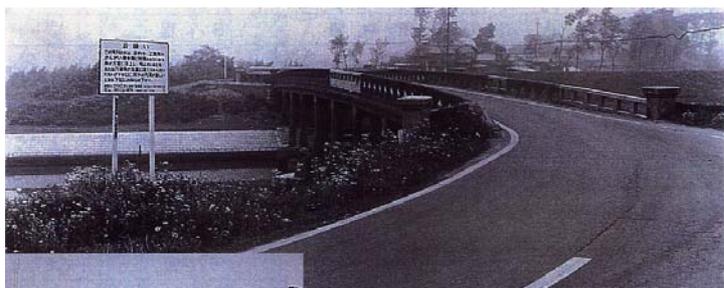
資料一 8



横の写真は昭和 20 年代頃の松伏（堂面橋周辺）です。当時は渡し場があり、家もまばらでした。



現在では開発が進み多くの住宅などが立ち並んでいます。



上の写真は昭和 50 年頃の弥生橋です。当時は歩道もなく、幅の狭い橋でした。現在（下の写真）の橋は昭和 51 年に架け替えられ、今では交通量も多い主要幹線道路として大きな役割を担っています